

スーパーグローバルハイスクールの研究開発を振り返って

岐阜県立大垣北高等学校長

増田俊彦

スーパーグローバルハイスクール（SGH）の5年間にわたる教育課程の研究開発を終え、ここに最終年度の報告書をまとめることができました。事業の実施に当たり、運営指導委員を始め、企業、大学、自治体、保護者など、多くの皆様から多大なるご支援を賜り、充実した研究成果を収められましたことを改めて感謝申し上げます。

本校のある岐阜県西濃地区は、東南アジアや東アジアを中心に企業展開する製造業が多数存在しており、指定年度の平成26年度頃から、地元企業や地域社会から本校に対して、グローバル・リーダー育成の大きな期待が寄せられていました。また、学校教育では、激動の現代社会を生き抜くために、グローバルに通用する課題発見力や課題解決力の育成が急務となり、SGHの指定は、先進的な教育実践を行い、本校の教育力を高める絶好の機会でもありました。

そこで、研究開発構想名を「清流の国ぎふ アジアを学び世界をつなぐ千六百人のリーダー育成」とし、東南アジア、東アジア諸国をフィールドとした課題研究を取り入れた教育課程の実現を図りました。当時、スーパーサイエンスハイスクールにおける自然科学系の課題研究が先行事例としてありましたが、多様な解が想定される人文社会系の課題研究において、科学的なアプローチを行う手法については、教職員にとって未知の領域であり、教育課程の構築には難しい面がありました。しかし、大学教授によるアカデミックな手法の導入や、地元企業・自治体等の直接的な支援等により、学校設定科目「SGH課題研究」を運用し、研究手法を体系的に習得させた上で、持続可能な開発に関する課題研究に取り組みせました。現在本校では当たり前ものとして定着した、情報、言語、リサーチクエスト、研究計画作成、プレゼンテーション、論文作成などの基礎技術を習得し、現状分析(WHAT)、原因追究(WHY)、解決策提案(HOW)を踏まえた探究活動を実践しています。また、より発展的な研究ができるよう、ベトナム・カンボジアにおける海外フィールドワークや大学・企業等の外部機関における研修も充実しました。

5年間の研究実践に伴い、多面的・総合的な視点で論理的に物事の本質を捉えようとする生徒が増加するとともに、状況や原因を自分自身で調べたり、創意工夫により課題を解決しようとする主体的な姿勢が育っています。研究結果は、相手に理解できるように図表や文章にまとめることが大切だと考える生徒が増え、表現力やコミュニケーション力の重要性もより認識するようになりました。また、国際課題の研究や外国人との直接的な交流を通して、積極的に異文化交流や留学を望む生徒が増え、将来は国際的に活躍したいと考える生徒が増えています。これらのことから、当初のねらいは概ね達成できたのではないかと考えています。

来年度から、新学習指導要領への移行措置として「総合的な探究の時間」が先行実施されます。本校では、1・2年生において、週2時間で実施してきた学校設定科目の内容を週一時間に落とし込み、これまでの成果を活用しながら実施する計画をしています。実施に当たっては、週一時間で探究を深める具体的な方法や生徒の主体的な動機付けを図るテーマ設定、研究結果を生徒自身が実践・検証する場面設定等が課題だと考えています。これらの課題を克服できるよう取組を工夫し、グローバルな視点で持続可能な開発に貢献できる人材の育成に引き続き努めてまいります。